

あつたし、邪馬台国ブームに乗ってこんな本まで出るようになったかと思うだけで、手に取って見る気はしなかった。

ところが、しばらくするとその隣に、『失われた九州王朝』が並んだ。私の考える九州王朝の語を初めて活字で見て、即刻手に入れ、以来私は、古田氏の書の全てを検証し、常に九州王朝史観を念頭に置いて、古代を見ている。

しかし、古田氏の三部作を読んで、『先生は神籠石を「存じない』と知った。これはお教えしなければ……』と考えたが、相手は雲の上の人、あれこれレターをひねくり回しているうちに、先生も気付かれたことを知り、出さず仕舞に終わった。先生に初めてお会いしたのは、それから三〇年経った二〇〇七年一月二〇日、『古田史学の会』の新年会の席であった。そこでこの神籠石の一件をお話ししたら、いつでも訪ねて来なさいと名刺を下された。私にとって、神籠石に纏わるゆかしい思い出である。

10.九州王朝から近畿天皇家王朝へでは、九州王朝史観によって最後を締めよう。六〇〇年から遣隋使、遣唐使を派遣して中国の情勢を掴んできた九州王朝は、唐に滅ぼされた百済を再興し、半島を日本防衛の拠点として、あくまでも唐と対決する道を選んだ。ところがその半島では、後に新羅の王となる金春秋が、九州王朝とは正反対の道を進む。金春秋は自ら日本と唐に赴き、自らの目で両者を見定めた上で唐を選び、わが子を人質として唐に

差し出し、唐と運命を共にする道を選んだのである。

九州王朝は、百済と組んでも新羅一國を倒すことが出来なかった。にもかかわらず、唐と新羅の二國を敵に回したのである。そして六六三年、半島の白村江で唐と新羅の連合軍と対決し、大敗を喫する。

この結果、半島では百済と高句麗が地上から姿を消し、唐の占領軍が半島から去った後、新羅は悲願の半島統一を達成する。新羅にしてみれば、唐の力で百済・高句麗の敵対勢力と日本の介入を除去してもらったようなもの。その唐が、半島に莫大な人的・物的資源を注ぎ込んだ上に、お国の事情によって自ら国に引き返ってしまったのである。正に新羅の一人勝ちである。

列島では、白村江の敗戦の後、九州北部は一時、唐軍に占領された。神籠石十一城の土塁は、版築であるにもかかわらず、ほとんどその姿を残していない。これが何故か解らなかったが、今は、この唐の占領軍によって破壊されたのであろうと思っている。そして、九州王朝は滅亡への道を進む。

振り返ってみれば、二二八年、遼東半島の公孫淵は、魏・呉・蜀の三国に分かれて争う中国を侮り、年号を立てて自立し、魏一國と戦って敗れ、姿を消した。それから四百年後、九州王朝は、無謀にも、中国全土を統一して一つの中国となった唐と新羅の二國と戦う道を選び、地上から姿を消したのである。

一方、近畿天皇家王朝は、六六三年の白村江の戦いを忌避し、戦後、九州

北部を占領していた唐軍が去った後、九州王朝と入れ替わって、列島の覇者となる。結果を見れば、近畿天皇家王朝は、不作為によってダメージを受けることを免れ、唐との関係も壊さず、漁夫の利を占めた訳である。

その近畿天皇家王朝も、唐の占領軍の去った後、唐の再度の襲来に備えて、大野城・基肆城・水城を設け、防人の制度まで整えた。しかしその後、唐軍の列島までの侵攻はない。だから、神籠石の《版築の土塁》は消えてしまったが、大野城・基肆城・水城の《版築の土塁》は今もきれいに残っている。(二〇一三・七・二)

古事記の国生み神話に玄界灘の島々を見た！(中)

アマチュア古代史研究者
湊能基呂太郎(おのころたろう)

(3) 大島(大島流別おたまるわけ) || 大島(おおしま)

いわずとした天皇家とゆかりが深い宗像大社が所有する宗像三宮(沖津宮・中津宮・辺津宮)の中津宮があるのが大島である。

古事記や日本書紀の伝承の中で、大島の湍津姫神を含む宗像三女神は、天照大御神とスサノオ尊の誓約によって、スサノオの剣を天照が噛み砕き、吹き出して誕生させたとなっている。まさに天照大御神とスサノオ尊の大霊(おたま)を別けて誕生しているといえないだろうか。

また、宗像大社のHPによると、以下のような説明がある。



『宗像市大島に鎮座する中津宮は、湍津姫神(たぎつひめのみかみ)をお祭りしています。海運漁業者の信仰が、とりわけ篤いお宮です。大島の北側には「沖津宮遙拝所」があり、天気の良い日には、沖ノ島を臨むことができます。(宗像大社のHPより抜粋)』

また辺津宮にある第二宮は、中津宮の御分霊を祭っている。『高宮へと続く宗像山入り口12に、沖津宮、中津宮の御分霊をお祭りする、第二宮、第三宮が鎮座しています。第二宮、第三宮は、伊勢神宮の第六〇回御遷宮古材によって再建された唯一神明造の社殿です。伊勢神宮の別宮である伊佐奈岐宮(イザナギ神のみや)・伊佐奈弥宮(イザナミ神のみや)の古殿で造営され、第二宮が沖津宮(沖ノ島)、第三宮が中津宮(大島)の御分霊をお祀りしています。(宗像大社のHPより抜粋)』

つまり大島は「宗像三神が分かれて祀られている島でもあるが「イザナギ神・イザナミ神の大霊(おたま)を別けて祀っている島」と見ることができるといえる。

(4) 女島(めいしま) || 姫島(ひめしま)

島の鎮山は中央よりやや北側にあり、北

岸は断崖絶壁もある険しい地形となっている。

『産の穴(うぶのあな)うぶのあな(「は姫島神社に祭られている豊玉姫命」とよまひめのみこと)と生島神社の女神が生まれた場所だとされており、切り立った岩場に浸食された二つの穴が開いていて、中は綺麗な丸い石が敷き詰められたような感じになっています。』(日本の島・福岡県・筑前諸島・姫島)



豊玉姫命は、海神・綿津見神(海若)の娘であり、天孫(邇々芸命)に大山津見神の娘木花佐久夜毘売(のほなぐさひめ)との間にもうけた火遠理命(ほおりのみこと)が代であるが、志賀海神社の神楽からは、安曇の君を褒め称える歌とされるらしい。醍醐天皇の勅撰和歌集である古今和歌集編纂時には、安曇氏は朝敵であったため、編纂者の紀貫之は、これを知ってあえて「読み人知らず」題知らずとしたのではないかと、古代史研究家の古田武彦氏は主張している。志賀島を知詞島と比定できるならこの主張を裏付けるものとなる。さて、志賀島の志賀海神社は綿津見三神を祀っており全国の綿津見神社の総本宮でもある。綿津見三神とは、イザナギ神が黄泉の国から帰って禊をしたときに産ま

知詞とはどういう意味だろうか。「詞」とは「言」を知る島といふことになる。詞(ことば)について調べると、詞書(ことばがぎの説明として)『和歌や俳句の前書きとして、その作品の動機・主題・成立事情などを記したものである。』(大辞泉)である。

これについては思い当たる興味深い神事がある。志賀海神社では四月と十一月の例祭において全国的にも珍しい「君が代」の神楽が奉納されるのである。この神楽は「君が代」の成立を物語るものであり、まさに「知詞(詞の意味を知っている)」といえるのである。古今和歌集に「読み人知らず」として掲載されている「君が代」であるが、志賀海神社の神楽からは、安曇の君を褒め称える歌とされるらしい。醍醐天皇の勅撰和歌集である古今和歌集編纂時には、安曇氏は朝敵であったため、編纂者の紀貫之は、これを知ってあえて「読み人知らず」題知らずとしたのではないかと、古代史研究家の古田武彦氏は主張している。志賀島を知詞島と比定できるならこの主張を裏付けるものとなる。さて、志賀島の志賀海神社は綿津見三神を祀っており全国の綿津見神社の総本宮でもある。綿津見三神とは、イザナギ神が黄泉の国から帰って禊をしたときに産ま

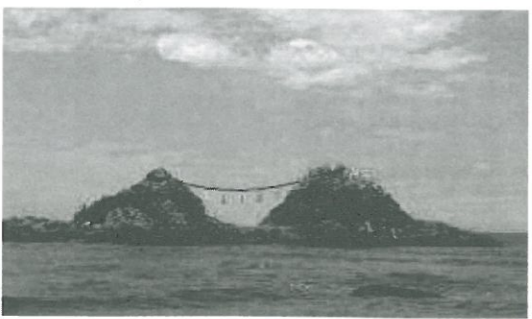
れた神であり、海の神様である。また、大綿津見神という綿津見三神とは別の神があり、こちらはイザナミ神・イザナギ神から産まれた最初の綿津見神(海神)である。また興味深いのは、この大綿津見神は、豊玉彦(つまり豊玉姫命の父親として海幸彦・山幸彦)の段で登場する(と)で、さらに綿津見神は後に阿曇族の祖となったという。この氏族は海人族として古代日本の有力氏族となり、全国に散っていた。安曇族が移住した地とされる場所は、阿曇・安曇・厚見・厚海・渥美・阿積・泉熱海・飽海などの地名として残されているという。

さて、知詞の島の別名天の忍男(あまのおおと)とは何か。これは「日本神話の神。天孫降臨に際し、天津久米命(あまのむねのみこと)とともに先駆けを務めた。大伴氏の祖神。デジタル大辞泉』である。また「大伴は、「大きな伴造」という意味で、軍事的に多くの氏族を束ねていたとされる。皇宮警察や近衛兵のような役割をしていた。』(このことである。

結局まとめると、イザナギ神・イザナミ神の近衛兵である天乃忍男が綿津見(海人族)を束ね、博多湾に侵攻し制圧下においた。その綿津見の子孫である阿曇氏を褒め称える歌である「君が代」の意味を知っている島といふことになる。

(6) 両見島(たにしま) || 天両屋(あまのふたや) || 二見ヶ浦の夫婦岩

伊勢志摩の二見ヶ浦も同様の岩があり祭祀が行われているが、私は元は糸島(伊都国の志摩)の二見ヶ浦で行われ



一方、糸島の二見ヶ浦では、夫婦岩のしめ縄の先に見えるのは、「沖ノ島」か「小呂島」である。糸島の二見ヶ浦で、伊勢志摩と同様の祭祀が行われていたと仮定すると、糸島二見ヶ浦で興玉神石にあたるのは「沖ノ島」か「小呂島」である。

では、どちらか？この答えは沖ノ島ではないだろうか。なぜかというと、沖合の海面下にある「興玉神石」置き霊神岩(おきたましんせき)に「おさわわしいのは海(の)正倉院沖ノ島であるからだ。しか

(5) 知詞島(天の忍男あまのおしお) || 志賀島(しかのしま)

